平成 28 年熊本地震関連情報

一般社団法人千葉県社会福祉士会
広報部会

会員の皆様

日頃より、会の活動にご協力いただきありがとうございます。
先月の熊本大地震の発災以来、救助救援活動が続き、現在はこれからの復興、生活再建に向けた準備段階に移行しております。
しかし、被害が局地的に集中していたこともあり、仮設住宅の整備が進まず、避難所から被災者が動けない状態が続いています。
また、避難所にいられず車中や倒壊の危険が残る自宅に戻る被災者も数多くいます。
日本社会福祉士会は、熊本県社会福祉士会及び九州各県の社会福祉士会と連携し、熊本県内での支援活動にかかるコーディネートを行っています。
みなさまにおかれましても、熊本地震の被災地支援活動［被災地支援者募集］の趣旨をご理解いただき、支援者としての登録をお願いいたします。
登録の際には、「被災地支援者登録フォーム」に記入して千葉県社会福祉士会事務局あてにご送信ください。
日本社会福祉士会からの活動支援費（3,000 円/日）の他に、当会からも活動費助成（5,000 円/日）がございます。
千葉県社会福祉士会ホームページ http://www.cswchiba.com で、［被災地支援者募集］「被災地支援者登録フォーム」をダウンロードしていただけます。

本会会員から被災地支援の活動報告を届いています。今号の点と線で紹介しておりますが、提出時期の都合に間に合わなかったものを添付いたします。

現在、支援を行っている西原村、益城町、双方とも、まだまだ、支援が必要な状況でありますが、実際には支援できる会員が足りず、日本会や、熊本県士会の皆さんも大変ご苦労されておられたようです。
来年３月まで、まだ長い道のりでが、途切れることなく心を継続していけるよう、一人でも多くの会員の方に、被災地での支援活動の現状を知っていただき、協力してくれる仲間が増えればという想いで、報告書をまとめてくださったとのことです。
ぜひ、ご参照ください。

熊本地震被災地支援活動報告

活 動 期 間　　H28/10/1（土）~10/11（火）　派遣第 23 班・24 班
活 動 場 所　　西原村地域包括支援センター
報告者氏名　　榑林　元樹　（千葉県）

[西原村の概要]

西原村は熊本市から西へ車で 40 分、阿蘇外輪山の美しい山々の麓に広大な牧場と畑が広がる美しい村です。

※人口 6,902 人、世帯数 2,585 世帯　高齢化率は 28%（平成 28 年 7 月末日現在）

（震災前と比べると人口が 154 人減、世帯数は 46 世帯減）

4 月 14 日・16 日と熊本県を襲った激震（マグニチュード 7.3、最大震度 7）により西原村も甚大な被害が発生しました。5 人の尊い命が犠牲となられ、住家の半壊以上が 1281 棟（全壊 505 棟、半壊以上 1281 棟）調査数は 2,831 棟、り災証明書累計申請数は 2387 件、村のほぼ全域が被害に遭い、多くの方が被災され避難所での生活を余儀なくされました。

7 月 9 日には応急仮設住宅 302 戸が完成し、最大 6 箇所（最大 1809 名）あった避難所も現在は全て閉鎖され、仮設住宅内でのサロン活動や、仮設住宅の住民による気晴らしカフェなど皆が集える活動もはじまり、今後の生活再建に向けて動き出しつつある状況です。

[支援活動の内容]

今回の支援活動での主な活動内容は次の４つでした。

①要援護者を訪問しアセスメントして、要援護者基本情報シートを作成すること
②ご自宅で生活されている方の家を訪問し、安否確認と生活状態をアセスメントすること
③今後始まる支えあいセンター開設に向けて情報を整理すること
④サロン活動等に参加し、たくさんの方の声を聞かせてもらうこと

西原村の応急仮設住宅は、地域ごとにまとまって入居できているため、仮設住宅内の隣近所に顔なじみの親戚や友人が多くいて安心という声を聞くことができました。

サロン活動も仮設住宅のブロックごとに週１回ずつ開催されているとともに、毎週水曜日には仮設住宅の住民ボランティアの運営による「気晴らし喫茶」も始まっています。

その一方で、仮設住宅に住んでいることになっていても、実際には全壊や半壊の家に戻り生活をしている方などもいらっしゃいます。地区の住民のほとんどが仮設住宅に住まわれているのに、自宅に帰られて生活をしている独居高齢者は水道がまだ復旧しておらずゴミ屋敷状態の家にお一人で生活されていました。また、知的障害の息子と犬、猫がたくさんいるために仮設住宅を出て、家に戻られている家族など震災を機に見えてきた生活課題を抱える人たちの姿がありました。

西原村地域包括支援センターは職員２名（主任介護支援専門員と社会福祉士）体制で、高齢者だけでなく、村の総合相談機能を一手に担っています。目まぐるしい状況での日々の業

務においても、丁寧に住民のお話をお聞きしてその方たちの思いやニーズをしっかりと受け止められていました。SW の机の横には、バイスティックの 7 原則が貼ってあり、常にご自分の姿勢がどうだったかを振り返りながら住民一人一人に寄り添われている真摯な姿勢に心を打たれました。地域包括支援センターが中心となって動いていけるよう今後も継続的な後方支援が必要であり、そのための切れ目のない支援活動とその質を担保するための活動引継ぎが重要であると感じています。

[訪問してお聞きした内容]

仮設住宅や個人宅を訪問しアセスメントをする際、どのようにお話を切り出すか初めは戸惑いがありましたが、実際にお伺いしてみるとみなさんからは、溢れ出るようにお話をしていただきました。震災から半年が過ぎており、被災された方々はご自宅の再建など今後の生活への不安や負担、仮設住宅での生活のストレスも多くあると思います。そのような中で、お話をお聞きしていると、困っていることや辛いことだけでなく、大切な家族のお話やこれからの生活についての思いなどのお話をたくさんお聞きすることができました。被災された皆さんのお話をお聞きして、その思いに寄り添うことができたなら、自分も何らかの力になれているのだと感じることができました。

＜ご自宅が全壊し、娘夫婦宅で生活されている N さん＞

3 年前に亡くなられた奥様のお話をされながら、ポロポロと大粒の涙が目から溢れていました。倒壊した住宅の中に奥様のお仏壇が残っているが出すことができないとおっしゃっていました。ずっと気になっているがどうしようもないのだとお話されていました。

＜仮設住宅の縁側でお話をお聞きした Y さん＞

自宅は全壊してしまったが、畑もあるし、自分はまた、元の場所に家を再建しなきゃならない。そうしないと自分は前に進めないのだ。95 歳でも前に進まなきゃいけないのだと伝えてくれました。

＜毎日朝から焼酎を飲んでしまう S さん＞

引継ぎではお酒の量が多くなっており心配な方でしたが、お昼に訪問したときはシラフの状態で、料理をしながらお話をしてくれました。ちょうどご自宅の解体作業が始まり、立ち会わなきゃいけないし、病院も行かなきゃいけないし忙しくなるよと嬉しそうに話してくれました。

＜ボランティアに家屋の片付けをしてもらった U さん＞

震災前から入院しており、退院後の生活再建に向け様々な課題を抱えられていましたが、災害ボランティアセンターから 10 人のボランティアさんが来てくれて、家の中の片付けを手伝ってくれ、次の日には見違える程家の中が綺麗な状態になっていました。とても晴れやかなお顔で、ここで頑張っていくよ！と少し背筋を伸ばした感じでお話してくれました。

＜ボランティアにより再建された公民館でのサロン＞

2 回目の地震の時に 1 階の寝室で寝ていて家の 1 階部分が潰された。真っ暗な中で動けずに助けを求めて叫んでいたら、ご主人が助けてくれて、潰れた家から脱出することができた。

本当に主人には感謝している。男らしかった！とご主人のお話をしてくれました。

この地区のサロンは、毎週火曜日に開催しており、震災で公民館が壊れ４ヶ月開催できなかったが、ボランティアにより公民館が再建され、８月から再開。世話役さんは仮設住宅で生活しているが、サロンを開催しに来てくれています。ここはいつでも自由に来て、好きなことを話ししてくれればいいところなのだよ！と話す世話役の笑顔が素敵でした。

[これからの西原村での支援活動について]

①仮設住宅での孤立予防のための、支えあいセンターの支援

西原村の仮設住宅は地区ごとに入居しており、それまでの地域内での人間関係が仮設住宅内でも継続されています。現在、４ブロックある仮設住宅にはそれぞれ集会所が設置されていますが、自治会ができるまでは鍵の管理は行政が行っており、普段は施錠されています。集会所をコミュニティの拠点としてどのように活用していくのかについては、仮設住宅に住んでいる住民が自主的に考え皆で行動していけるような支援が必要です。すでにその基礎として、住民による気晴らしカフェの運営が行われており、中心となるキーパーソンが活躍されており、その方々が、10 月から始まる支えあいセンターの相談員となられる予定です。この新しく始まる支えあいセンターの活動も、住民同士でお互いに気にかけ合い、困ったことを支え合う仕組みとして機能できるよう支援が必要です。

②仮設住宅からご自宅へ帰って生活されている方の把握と支援

書類上は仮設住宅に住んでいることになっていても、ご自宅に帰られている方もおり、そのようなケースはもともと生活課題が複雑化しているケースであることと合わせて、余震や大雨による倒壊や土砂崩れに巻き込まれる等の危険が高い環境での生活や、ライフラインが未だ寸断されている状況での生活や、近隣住民が避難しておりいざという時に助けを求める近隣住民が誰もいないなど今回の地震に起因する課題も絡みあっています。そのようなリスクのある生活をされている方の把握と、継続的な見守りと支援が今後も必要となります。

これらのことは主に地域包括支援センターが今後も担っていくことになると思いますので、そのための後方支援を私たちはしっかりとしていく必要があります。

[最後に　今自分に出来ること]

熊本地震から半年が過ぎました。私も今回熊本に行くまでは、すでに過去のことのように感じて普段の生活をしていました。しかし、被災地では未だに、崩れたご自宅がそのままの状態であり、そこに大切なものがまだあり、そこでもう一度、生活していこうとする人達が、将来の目処が立たないで生活されていました。実際に支援に行けなくてもできることはあると思います。まずは、まだ不便な生活を強いられながらもそこで踏ん張って生活している人達が在るのだということを忘れないということなのかもしれません。

支援活動の初日に、隣にある中学校で運動会が行われていました。お昼前のプログラムは全校生徒による組体操でした。生徒たちが大きなピラミッドを作り、最後に横断幕がかかりました。「私たちは西原村が大好きです」「たくさんの愛をありがとう」と子ども達の大きな

声が西原の空に響き渡っていました。

その後、家族や地域の人達もみんなで大きな輪をつくり西原音頭を一緒に踊っていました。村に一つしかない中学校の運動会は、村の人たちの宝物でした。

西原村の美しい自然とそこに住んでいる人たちの強さと優しさに触れ、私も西原村が大好きになりました。これからも自分にできる支援を続けていきたいと思います。

最後になりますが、現地で活動を支えてくださった熊本県士会の皆様、いつも笑顔で迎えてくれた西原村地域包括支援センターの皆様、そして長期間に及ぶ活動に送り出してくれた職場の仲間と家族に感謝の気持ちを込めて活動の報告といたします。

ありがとうございました。

西原村中学校運動会
「私たちは西原村が大好きです」
「たくさんの愛をありがとう」

西原村から遠く熊本市街や有明海を見下ろす丘の上
秋になっても咲いているひまわり達が村を見守ってくれているようでした